

非配偶者間生殖補助医療で生れた子どもの ナラティブ再構築に関する研究

Research on Narrative Reconstruction of the Children Born by Artificial Insemination with Donor's Semen

宮 嶋 淳

Jun MIYAJIMA

本論では、①DI者によるグループへのインタビュー調査、②国際会議におけるDI者の参画によるワークショップによるデータの収集、という2つの調査研究を基幹とし、DI者の「求め・訴え・願い」の根幹を明らかにすることを目的とする。本論で得た結論は、次のとおりである。1. DI者の訴えと願いは、[4つの訴え][4つの願い]と[自助力]から構造化され、それは時間が経過しても変化することが少ない、DI者に共通する「想い」である。2. DI者が自ら再構築した物語は、マクロなレベルにおいて認知されていく理路を確実に形成し続けている。3. 「人が人をコントロールする、支配する」という人権侵害から、DI者自らが発言することにより、自らが解放される契機を獲得しようとしている。4. DI者が自らの物語を語り続けることは、人権侵害から自らを解放するために欠かせない要件である。

キーワード：非配偶者間生殖補助医療、DI者、ナラティブ

I. はじめに

本論は、ソーシャルワーク学の立場から①子が「出自を知る権利」の根拠、②DI者を取り巻く社会構造と改善すべき社会システム、③DI者支援の視点とアプローチの方法を探求し、非配偶者間生殖補助医療で生まれた子の福祉が成立するための本質を明らかにすることを目的として実施してきた研究の一部を報告するものである。

本論の前提として「DI者が人権を侵害されている」という示唆を得てきたことを付言しておかなければならない¹。「DI者が人権侵害に晒されている」という知見は、筆者が複数年にわたり取り組んでいる、DI者の権利を擁護するソーシャルワーク研究の中核をなす。

本論では、①DI者によるグループへのインタビュー調査、②国際会議におけるDI者の参画によるワークショップによるデータの収集、という2つの調査研究から、DI者らの苦悩の共通点を明らかにし、DI者の「求め・訴え・願い」の根幹を明らかにすることを目的とする。

上記の①及び②の2つの調査研究の結果を考察し、それぞれから導いた結論を連結・統合化し、その整合性並びに再帰性を吟味して本論の結論を導いた。

本論で得た結論は、DI者像は一様ではなく、DI者一人ひとりがおかれた家庭環境や通過してきた人生経験、さらには遭遇した社会環境により、DI者一人ひとりが個性的な存在であることが示唆された。また、DI者の「求め・訴え・願い」は、国境を越え、2009年という現在における生殖科学を取り巻く諸情勢を背景とした社会において、共通性のあるヒューマンニーズであるということが示唆された。すなわち、DI者のヒュー

マンニーズは、DI者に共通する[4つの訴え][4つの願い]と[自助力]で構成されている、という結論を得た。

II. 調査研究

本論の調査研究は、当事者へのインタビュー調査(第1調査)と当事者の参画によるワークショップ(第2調査)とから構成されている。

(1) DI者へのインタビュー(第1調査)

1. 概要

わが国のDI者3名に、2009年1月10日、東京都内にご参集いただき、2時間程度のインタビューを行った。このインタビューには筆者のほか、DI者の支援を行っている学識経験者2名が同席した。本調査インタビューの目的は、DI者の声の変化の傾向を一定の尺度を用いて、測定しようとするものである。すなわち、このインタビューで用いた尺度は、筆者が抽出したDI者の発話記録から作成した[DI発話指標]と同一である²。

2. 調査の方法

インタビュー調査を行う1カ月前に、調査項目(29のビネット)をインタビュー対象者に示し、インタビュー当日に回答メモを作成し、持参してもらうこととした。インタビューの場において、各々の回答メモを披露してもらい、他のDI者と回答内容を共有した。また、ビネットに関する回答の変化がないかを確認するため、調査用紙を回収した。インタビュー調査で用いたビネットは、筆者が[DI発話指標]として、これまでの研究で活用してきたDI者の発話から構成した指標である。今回のDI

者へのインタビュー調査においても、筆者による[DI発話指標]を用い、ピネットの形式に加工し、ピネットに対する今の思いを記述してもらい、追加のインタビューを行っている。

3. 倫理的配慮

インタビュー記録の内容並びに本論全体を、インタビューに応じて頂いた当事者に公表前に提示し、必要に応じて修正したのち、了承を得て公表している。

4. 結果と考察

インタビュー調査から得たデータは表1～3のとおりである。

表1～3をみると、[DI発話指標]を構築する契機となった、インタビュー調査を実施した時点(2003年)で3名のDI者が抱いていた思いが、2008年時点で「変化したもの/変化しなかったもの」、また「人によっては変化したもの」など、多様であることが了解された。したがって、ここで認められたDI者の思いの変化がどのような要因・誘因によってもたらされるのかを明確にする必要性が示唆された。そこで、本論ではDI者の思いに変化をもたらす要因・誘因を、筆者らが提示した「DI者を取り巻く構図」の諸領域のうち、どこに引き寄せられているのかを考察することとした。なお、分析に先立ち、29のピネットのうち、18&19&22の3つのピネットは、回答者の思いから著しく乖離していると認められるため、分析対象から削除することとした。

3名の回答が「完全に一致」または「ほぼ一致」している、あるいは回答者が記述した、選択上の理由を加味すると、3名の回答の共通項が見出せる。3人の回答が「1」で一致するピネットは、[真実告知]から数年という時間の経過に左右されることのないピネットで、3&6&17&24である(7)。

3人のうち一人が異なる、回答を寄せていながら、回答理由をみると、部分的に加筆修正することにより、3人の意向が一致していると判断できるピネットは、1&2&4&5&9&10&12&14&16&21&23&26&27の13項目に及んだ。すなわち、この13のピネットが示唆することが、DI者の共通性である可能性が(1)。

回答が不一致である理由を加味しところ、表4が得られた。表4は、表中左の列から順に[NO=設問5のピネットに付した番号]とし、次の[質問項目=ピネット]であり、[回答=3人のDI者が選択した、選択肢の番号]で、便宜的に左から順に昇順で並べた。[選択に対する理由(条件)を加味したピネット]欄が、ここでの考察のポイントとなるだろう。[選択に対する理由(条件)を加味したピネット]欄中で下線を引き、斜体で表示した部分が、DI者が今回の調査において記述された、あるいはインタビューで得られた発話記録である。また表4中のピネットの下線部・斜体部分を抽出し、その意味を手繰ってみると、その結果は2つに分類することができた。

第1に他者に関する認識であり、第2に自己に関する認識である。他者に関する認識に関しては、「はっきり

としたことは言えないが、どこまでできるか疑問1&4)」「はっきりしたことは言えないが12)」「すべてかどうかは判断できないが16)」「家庭での生活がすべてウソの上に成り立っていたとは言い切れないが14)」というピネットを相対化させる、条件を加味させる発話が抽出された。これらの記述、あるいは発話の意味の共通性を概念化すると、他者との関係に関する受け止め方が断定的ではなくなっていると解釈できる。また、他者から向けられている感情に対して「侮辱されている9)」という深いレベルでの感情が明確化されていると同時に、「が、広めていく必要も感じます10)」と社会化されている。つまり、向けられている感情の受け止め方が深化し、かつ外的な働きかけの方向が明確化していると解釈できる。さらに他者と区分できる援助者に対しては理解に加え「傾聴し、共感5)」が追加され、求めていることが明確化していると解釈できる。

自己に対する認識では、「そうでない部分がある2)」「例えば26)」と表現されているように、自己に対する認識が多様化、あるいは相対化している。そして、「[親子]のそぶりは苦しい23)」「失くしてしまいそうでした21)」「コントロールもできます27)」と、自己が抱える苦悩への対処方法を自ら見出していることがわかる。

回答者の置かれた立場や状況により、回答が変化すると考えられるピネットを表1-3に基づき集約すると、ピネット7&8&11&13&15&20&25&28&29となる(ウ)。

三者三様の回答であった理由を、回答そのものに戻って確認しておけば、次のような特徴が読み取れる。すなわち、ピネット7&8&11&20は、「結婚」「子ども」「親子=同居」がキーワードのなっており、「DI者である」というよりも一個人としての結婚観や子ども観、回答者が出会った、あるいは経験した集団関係等により左右されると社会科学上認め得る回答となっている。ピネット13&15については回答者が、育ちや家庭の状況との関係に関わる意味が含まれていると解しており、各々の育ちの状況が影響していることが理解できる。ピネット25&28&29については、ピネットの表現上の課題が浮き彫りになった回答となっている。ピネットに表現されていることを表現どおりに受け止めれば、[否]という回答が浮かび上がり、回答者が自身の思いから類推を加えることにより[是]とし、あり得るという回答になっている。

5. 第1調査の結論

このように考察してみると、29項目にわたるピネットには、①時間を経過しても変化せず、DI者の思いとして共通するもの[上記の(7)]、②何らかの理由で変化し、部分的に条件を加味すると、DI者の思いとして共通するもの[上記の(1)]、③DI者の発話として記録されたが、その内実としては個人的な価値観や育ちに影響を受けており、DI者の思いとして共通しているとは言い難いもの[上記の(ウ)]が含まれていたと解釈できた。

表1 ビネットを活用したDI者の変化(1)

NO	質問項目	回答者A		回答者B		回答者C	
		選択肢	その理由	選択肢	その理由	選択肢	その理由
1)	AIDは、私の親を「自信が持てない親」にしてしまった。	3	子どもとの関係についてはややや自身を失うようなところはあるが、子どもの視点からは話さずには話さなかったことには分らない。	2	AIDで生まれたという事実は話さずには32年隠してきたから。	1	AID選択の時点で、その選択に自信を持てないから、積極的な告知や、告知後の子どもへの対応ができず、この問題をより複雑にしていると感じるからです。
2)	配偶子提供で産まれたという事は、本人にしかわからない、体験です。	1	配偶子提供自体が、社会的認知の低さ、「隠されている」かのような印象から、DIの現実を把握することがまず困難である。本人以外の人が子どもとしての体験を理解することは困難である。実際に、相談相手として考えたときに、一般的な友人・教育者・医療者では子どもの体験を共有することは難しいのではないかと。	1	医師がまだまだ理解が足りないと思う。理解できないまま、続けるべきではない。	3	・大切な人との信頼関係がくずれ、それまで自分が自分だと思ってきたものが突然崩されるという部分については、他の似たような経験からも推測して共感してあげられること、過去のことで、だし、自分の出生の部分に人為的な介入があることへの違和感や、遺伝的なルーツの半分がわからないことへの不安感、同じような状況に陥る他のケースがあまりないと思うので、当事者以外の共感を得ることは難しいと思います。
3)	医師は、配偶子提供を希望するカップルに、「真実告知」の必要性を説明する必要があります。	1	真実告知を行うかどうかはカップルの判断になるが、少なくとも真実告知の必要性があることは伝えられなければならない。真実告知が必要になることは、この治療でのものも発生確率の高い治療リスクである。医師の一つである以上、医師は医療のリスクを患者に説明すべきであり、患者は聞いておく必要がある。	1	医師がまだまだ理解が足りないと思う。理解できないまま、続けるべきではない。	1	この技術について提供される情報が非常に少ないなか、医療現場での医師の言葉の影響は非常に大きいと思われ、過去、医師が隠すことを勧めたためこの技術が隠されて行われ続けているのなら、医師の意識が変われば、告知もすすむのではと思うからです。
4)	医師は、配偶子提供を希望するカップルに、医療がやると「アフターケア」について、説明すべきです。	2	現状では医療サイドによるアフターケアが確立されておらず、一概にカップルに説明することには疑問がある。しかし、カップル同士のものしくは生まれた子どもによる自助的なアフターケアは徐々に組織化されつつあり、限定的な情報ではあるが、医師は説明する努力をすべきである。	1	夫婦が得るAIDの情報が、医者からほとんどだと思われ、医者の話は信じやすいと思う	1	アフターケアが全くないことが、真実告知に踏み切れないう要素にもなっていると思うからです。
5)	カウンセラーやソーシャルワーカーが、「DI者の苦悶」が理解できない人では困ります。	5	カウンセラーやSWはあくまで当事者ではない、DI者の苦悶を完全に理解できないと思われ、一般的には傾聴と共感、適所への紹介ができればよいと思う。	1	すべてのカウンセラーに望むわけではないですが、DIのスペースやリストがいて欲しいと考えています。	1	DIで生まれたことを知った人に対する相談窓口が多くないなか、そういった人が最初に出られるかもしれない場所にいる方にも、少なくともDIに対する知識が少しはあつてほしいと思います。
6)	カウンセラーやソーシャルワーカーは、「DI者の怒りの受け止めてくれる人」であってほしい。	1	まず話を聞いて受け止めて欲しい。これに尽きる。	1	何も言わず、ただ、うなずいて欲しいと思うけれど、自分で消化することかかるとも思う。(無理なことかもしれないと思う。) ヒア・カウンセリングがいろいろなかとも考えます。	1	DIで生まれたことを知ることによって生まれる痛みや怒りの感情をまずは受け止めてもらうことが必要です。一般の方ならまだしも、専門職にある方には、それを否定し、当事者を二重に傷つけるようなことはしてほしくありません。
7)	「結婚を考えていない人」は、DI者のことを理解してくれませんか。	5	DI者の苦悶や不安・憤りを理解するのに、結婚を考えているかいないかは関係ない。	3	そうとも限らないようです。(知る限りで)	3	2)で答えたように、結婚や出産について考えていなくても、ほかの経験などから推測して共感してもらおうことは可能だと思います。
8)	「子どもを望んでいない人」は、DI者のことを理解してくれませんか。	5	自分が子どもを望むか望まないか、と、DIの子どものことを理解しようとすることは別である。	3	子どもとして、生まれた立場として、考えてくれる人もいます。	3	上と同様です。
9)	AIDのことを話すと、「聞かなかったことにする」という態度をとる人がおり、悲しくなります。	3	聞かなかったことにするというのは分らない、が、そう言う人がいたら問題だ。個人と個人の会話として、侮辱していい。	1	よくいます。	2	相手にそのことに対する知識が全くないことが原因であり、それならは自分が話してこの問題を伝えていくことも必要なかもしれないと思うことがあります。
10)	AIDの話を2度すると、「その話はもういいよ」と聞いてくれない人がおり、諦めを感じます。	3	そういう態度を取った人はまだいないため、わかからない。	1	います。います。	2	上と同様、それでも相手に話すことで問題を広めていくことが必要かと思えます。

表2 ビネットを活用したDI者の変化(2)

NO	質問項目	回答者A その理由		回答者B その理由		回答者C その理由	
		選択肢	選択肢	選択肢	選択肢	選択肢	選択肢
11)	AIDは「親子同居」という考え方に納得できない、深い怒りの原因になりました。	5	別にDIだからと言って、親子が同居してもいいと思うし、別居してもよいと思う。	2	一緒に居ることが、あまり安らかな気持ちにならない。	3	
12)	父が「妻とせめてつながっていれば良い」というのは、日だけじゃないのかと思います。	3	分かりません。多くの不妊カップルの男性がそのように考えているようですが、実際にAIDの現場には出てこない人を見ると、どこまで本気でAIDをやりたいのかわからない場合もある。反面、自分の子どもとして育てようという思いもある人もあると思う。父のAIDへの積極性や選択理由は一緒ではないだろう。よって「妻とせめてつながって」という言葉が、口先だけで本気でそう発言に納得していない男性もいるだろうし、本気でそう発言している人もいるだろう。ケースによるのではないか。	2	同意して、生まれても育てられなかつたから。	1	養子のように、夫婦がともに子どもと血縁関係がないという状態とは違い、片方だけがつながっていることでの対等でない関係が、むしろその後の家族関係に影響を与えようと思うからです。
13)	AIDのことを知ったとき、「血がつながってなくて良かった」と思いました。	5	血が繋がってなくて面倒だな、と思いました。親にあまり不満はなかったのです。	1	父とうまくいってなかった、愛されていなくて、逆になつたので、逆に納得しました。	2	父の病気が自分には遺伝していないことが確認できたので。
14)	両親は、私がAIDで産まれたという事実を隠して「ウソ」で生きてこられたのです。	2	家庭の生活が全てウソの上になり立っていたとは言い切れません。しかし、意図的に事実を隠しウソ偽りの情報の上になり立っていった部分は少なからずある。	1	「提供者が誰であろうと、私(母)だけの子・・・」と言って、32年間言わず、忘れるほどだったと話していたから。	1	
15)	AIDを了承した父親が、本当に望んでいたのかを聞いてみたい。	5	特に聞きたいとは思いません。望んでいたかどうかは別としてちゃんと育っているのが動機はあまり気にしていません。	2	そこまで強い思いは、今はないです。確認した方が、よいのかも知れないけど。	1	
16)	AIDは、夫婦の関係が壊れていくきっかけを作ったと感じています。	3	AIDが両親の関係を及ぼしたかどうかは、わからぬ。特に問題がないように見えるが、何らかの影響があるのかも知れない。が、それは分からない。	1	10年仲むつまじく暮らしてきた夫婦が、子どもが生まれてうまくいかなかったのだ。(母からの話により、そう思った。)	2	それがすべてだとは思いませんが、要素として大きな一つではあつたと思います。
17)	母親は、真実を告げなかつた理由を「子どもが知たら可哀想」と言っています。同意できません。	1	全く同意できません。母親に何が分かるか？幼少時に子どもは母親に内在されているかも知れないが、子どもは必ず母親とは別人格である。一般的には母親が死んだあとも子どもは生きるし、AIDの事実は何歳になろうと消えるものではない。子どもの一生の問題を母親の一時の感情で判断し、あまつさえ勝手に代弁するなどあり得ないことだ。		言ってません。が、そうだとしたら、言うべきであると思う。	1	真実を知ってかわいそうなのは、子どもではなく自分達であつたのだと思うからです。
18)	「私」をほしかったのではなく、夫婦関係を保つためにAIDを選択したと言われて、ショックでした。	3	そう言われたことはないで、わからない。		言われていません。	1	
19)	私の子どもに「あなたとお爺ちゃんとは血がつながっていないのよ」と話せるまでに、ずいぶん時間がかかりました。	3	自分にまだ子どもがないので、わからない。ただし、子どもにも、周回や親戚同様、比較的簡単に告知できるだろうと思う。		すぐ話しました。大切なことなので、かくすことなく話すべきだと思つてます。時期は見るべきかも知れませんが、親子・夫婦がしっかりとつていければ、話せると思う。		

表3 ビネットを活用したDI者の変化(3)

N0	質問項目	回答者A		回答者B		回答者C	
		選択肢	その理由	選択肢	その理由	選択肢	その理由
20)	私は、生物学上の父がわかるまで、結婚できないと思っています。	4	そんなこと言っていたら一生結婚できません。AIDを選択した親や、治療した医師のために自分の結婚まで制限されたくない。		既に結婚しています。	3	提供者がわかるかどうかより、AIDの事実を自分のなかでどこまで受け止められるか(その過程に提供者が見つかることも含まれると思います)
21)	AIDのことを知ってから私は、家族に気を遣いすぎて、自分を失くしていました。	2	気を遣っていた部分はある。特に父親に対しては、どう話しかけてよいか分からなかった。ただ、自失というほどの体験はない。	2	AIDが関係するかどうか・・・するのかな。自分の存在に自信が持たなくて、人のために自分を抑えすぎて疲れることは多いです。	2	
22)	夫は、私の出生の話を真剣に聞いてくれませんが、あきらめています。	3	妻は、と諦め替えればよいでしょうが、結婚していませんので、わかりません。いずれにしても、真剣に聞いてくれることが重要であって、事実が事実なのであきらめられるならそれで構わないと思います。	2	よくわかからないなりに、聞くようになつたと思う。他人事と思っっている部分もある。		
23)	私は「ウソ」を感じながら「親子」のそぶりではできないと感じています。	1	ウソを感じながら親子のふりをするのは難しいと思う。少なくとも、ウソの上で毎日生活し続けるのは無理だと思う。	3	親子のそぶり・・・しました。今さら、苦しい思いです。	1	
24)	いろいろと考えたことを聞いてもらおうと、気持ちたちが楽になることがあります。	1	一般的にも、人に傾聴してもらおうと気持ちたちが楽になることが多いですが、これはDIでも同様です。	1		1	
25)	自分を否定しなくなることがあり、そこで足踏みしていることが増えています。	5	DIに関して、自分を否定しようとは思いません。	2	歯がゆいとは、あまり感じなくなりました。それも必要な時間なのだと考えるようになりました。	1	
26)	「親子のつながり」という言葉に「ビクッ」としてしまったり、いつも敏感になっています。	1	「親子のつながり」と言う言葉に恐れや反発はありません。が、メディアの報道や、周囲の意見には聞き耳を立てていますのでニュースの中や、誰かが喋っているのを聞くと、聞き逃さないようにしています。	1	「親子」の話題が、TVや日常で、のぼらない日はないくらい、良く交わされることなので、だんだん慣れて合わせたりもしますが、ハワリーのあるときはつい反論したくなり、やっかいです。	2	
27)	AIDで生まれたことを知ってから、自分のことがわからなくなることがあります。	2	いつもは特に気にしていませんが、時々、重要な判断をしなければならぬ局面で自分がどこまで自分のことを把握しているのか、分らないことはあります。	2	前ほどではないけれど、コントロールできようになつたけど、自分は何者なのか、わからなと思う。	2	
28)	誰かを愛することができたら楽なのに、誰も愛せないのです。	5	そんなことはありません。	1	愛しいと思う気持ち、湧かなくて、自分は何だかつかつかつかつか、仕方ないとおもっている。	2	人を信用できなくなつたとは思いません。
29)	私のドナーが、突然、目の前に現れたらと想像すると、眠れなくなることがあります。	5	そんなことはありません。ドナーが急に現れたら、それはそれで嬉しいですが。	1	ドナーを知ることができない、できる・・・どちらとも心が揺れる。眠れなくなる・・・というか、それ以外のことが考えられなくなつたりすることはある。	3	

表4 回答者の選択上の条件を加味した結果

NO	質 問 項 目	回 答	選 択 対 する 理 由 (条 件) を 加 味 し た ビ ネ ッ ト
17)	母親は、真実を告げなかった理由を「子どもが知ったら可哀想」と言っていますが、同意できません。	1 1 1 1	母親は、真実を告げなかった理由を「子どもが知ったら可哀想」と言っていますが、同意できません。 いろいろと考えたことを聞いてもらおうと、気持ちが悪くなることはありません。
24)	いろいろと考えたことを聞いてもらおうと、気持ちが悪くなることはありません。	1 1	いろいろと考えたことを聞いてもらおうと、気持ちが悪くなることはありません。
14)	両親は、私がA I Dで産まれたという事実を隠して「ウソ」で生きてこられたのです。	2 1 1 1	家庭での生活がすべてウソの上に成り立っていると言いたくはないが、両親は、私がA I Dで産まれたという事実を隠して「ウソ」で生きてこられたのです。
3)	医者は、配偶子提供を希望するカップルに、「真実告知」の必要性を説明するべきです。	1 1	医者は、配偶子提供を希望するカップルに、「真実告知」の必要性を説明するべきです。
6)	カウンセラーやソーンジャーワークーは、「DI者の怒り」を受け止めてくれる人であってほしい。	1 1	カウンセラーやソーンジャーワークーは、「DI者の怒り」を受け止めてくれる人であってほしい。
4)	医者は、配偶子提供を希望するカップルに、医療がやるべき「アフターケア」について、説明するべきです。	2 1 1 1	医者は、配偶子提供を希望するカップルに、医療がやるべき「アフターケア」について、どこまでできるか疑問ではあるが、説明すべきです。
26)	「親子のつながり」という言葉に「ピクツ」としてしまおうくらい、いつも敏感になっています。	2 1 1 1	「親子のつながり」という言葉に、例えば「ピクツ」としてしまおうくらい、いつも敏感になっています。
2)	配偶子提供で産まれたということは、本人にしかかわからない体験である部分とそうでない部分がある。	3 1 1 1	配偶子提供で産まれたということは、本人にしかかわからない体験である部分とそうでない部分がある。
23)	私は「ウソ」を感じながら「親子」のそぶりはできないと感じるし、「親子」のそぶりは苦しい。	3 1 1 1	私は「ウソ」を感じながら「親子」のそぶりはできないと感じるし、「親子」のそぶりは苦しい。
21)	A I Dのことを知ってからからは、家族に気を遣いすぎて、自分を失くしてしまいました。	2 2	A I Dのことを知ってからからは、家族に気を遣いすぎて、自分を失くしてしまいました。
27)	A I Dで生まれたことを知ってから、自分のことがわからなくなることが今もあるが、コントロールもできます。	2 2	A I Dで生まれたことを知ってから、自分のことがわからなくなることが今もあるが、コントロールもできます。
1)	A I Dは、私の親を「自信が持てない親」にしてしまった。	3 2 1 1	はつきりとしたことは言えないが、A I Dが私の親を「自信が持てない親」にしてしまったかもしれない。
12)	父が「妻とせめてつながってほしい」というのは、口先だけじゃないかと思えます。	3 2 1 1	はつきりしたことは言えないが、父が「妻とせめてつながってほしい」というのは、子育てを放棄したという事実から、口先だけじゃないかと思えます。
16)	A I Dは、夫婦の関係が壊れていくきっかけを作ったと感じています。	3 2 1 1	それがすべてかどうかは判断できないが、A I Dは夫婦の関係が壊れていくきっかけを作ったと感じています。
9)	A I Dのことを話すと、「聞かなかつたことにする」という態度をとる人がおり、悲しくなります。	3 2 1 1	A I Dのことを話すと、「聞かなかつたことにする」という態度をとる人がおり、悲しくなります。
10)	A I Dの話を2度すると、「その話はもういいよ」と聞いてくれぬ人がおり、諦めを感じます。	3 2 1 1	A I Dの話を2度すると、「その話はもういいよ」と聞いてくれぬ人がおり、諦めを感じます。
5)	カウンセラーやソーンジャーワークーが、「DI者の苦悩」が理解できない人では困ります。	5 1 1 1	カウンセラーやソーンジャーワークーは、「DI者の苦悩」を理解し、傾聴し、共感できない人では困ります。

(2) DI者の参画によるワークショップ(第2調査)

1. 概要

筆者は才村³とともに、2008年8月に横浜で開催されたWAIMHにおいて、3時間にわたるワークショップを開催した。ここでは、日本のDI者2名とアメリカのDI者1名並びに筆者が発言し、才村が座長を務めた。

2. 調査の方法

ワークショップでのDI者の発言内容は、和文及び英文により当日、資料として配布した。また、発言内容は当日ICレコーダーで録音し、テープお越しをしたデータを発言者に示し、了解を得て掲載している。

3. 結果と考察

ワークショップで得られたデータを要約すると以下のとおりである。また、発言要旨の各段落の末尾に、当該段落に含まれる意味内容を、DI者の視点から吟味し、小見出し様に□で示した。

DI者の発言要旨

秘密主義を医師たちが取り入れた理由は、AIDを利用したカップルが感じるだろう「恥辱」という不名誉を夫婦が受けないようにするためである。多くのDI offspringは事実を知りたがっている。長く事実を隠そうとすればするほど、子どもはより傷ついていく。母の告知で、[不安と憤り]を覚えた。両親に騙されたと感じた。今までの父親との関係の悪さを納得した。父親を失った。3年後、母を亡くしてから自分の存在に不安を感じ、出自を隠されていたことに[怒り]を感じるようになった。今の私にたどり着くのに、当事者との出会いは大きかった。「もっと早くに告知して欲しかった」「提供者を知りたい」という共通の思いを抱いていることを安心して安心できた。AIDを隠すべきではない。もっと早くに知れたかったと思っている。大人になって、結婚も出産も終えてしまっただけの告知は遅すぎる。自分の土台となるルーツが嘘であったことで、その上に積み重ねた自分が崩れてしまったような感覚。自分を再構築しなければいけなくなった。

DI者がおかれた社会状況

このようなことを背景として、私たちは①当事者の心からの正直な訴えに耳を傾けてください。②当事者の物語は[悲しみ・怒り・悲痛]にあふれています。しかし、③変化に向かった前向きな希望にも満ち溢れています。そして、④私たちの尊厳や生まれながらの権利を、社会は尊重してほしいのです。

4つの訴え

また、①匿名のドナーから生まれた子どものケアのためには、情報を共有し、より信頼できる親子関係を構築する必要があります。②親からの積極的な告知が必要です。③出自を知る権利を認めるルール作りが必要です。④不妊カップルと提供者と生まれた人、それぞれを支えるしくみを整えることが必要です。

4つの願い

そして、政府を頼るよりは、まず自分たち自身が子どものケアの仕組みを作らねばならない。

自助力

4. 第2調査の結論

このワークショップの意義は、日米のDI者が国際会議という場で、自らの立場を訴え、それを記録として公開することができたことである。そして、表明されたDI者の発言は、第1調査で明らかにしたDI者像を、統合化し明瞭にする内容となっており、DI者の「声」を世界的規模で発信したことにより、社会的な影響を与えたことを否定できないということである。すなわち、ワークショップでのDI者の発言は、「DI者のおかれた社会状況」「4つの訴え」「4つの願い」「自助力」と名づけることができるヒューマンニーズを、DI者自らが明確に発信したものであると結論づけることができる。

III. 考察

本研究では、DI者へのインタビュー調査と当事者の参画によるワークショップでのDI者の発言分析を行った。さらに本論の結論を導くための補論として、ワークショップ当日に活用された、コードレイによる、DI者に対する国際的なアンケート調査の結果を二次分析し活用する。つまり、本調査の考察は①第1調査から得た発言分析、②第2調査から得た発言データ分析、③他者が行ったアンケート調査結果の二次分析を、重層化したトライアングレーションの手法によるものである。

1. 考察の理路

考察に用いる理論は、DI者の語る物語に焦点をあてていることから、物語理論(ナラティブ・アプローチ)とする。留意が必要なことは、この理論が心理学領域におけるセラピーを背景として、ソーシャルワークにも導入され、個への支援、とりわけトリートメントとしての特徴があることである。一方、ソーシャルワークは[人-環境]の接点に介入し、人権を擁護し、人権が侵害されているところには必ず社会的不正義が存在すると考えるエコロジカルなアプローチを構造的に有してきた。両者はソーシャルワークの今日的な2つの潮流であり、相対立するものと考えられる。したがって、本論では個に焦点をあて、ポストモダンの立場による物語理論を尊重しつつ、個の物語が脱構築化され、オルターナティブ・ストーリーが生起されたとき、それと同時にオルターナティブ・ストーリーを共有する、理解者・支援者の存在や社会を想起していくというソーシャルワークの理論を必要とする。つまり、DI者のオルターナティブ・ストーリーを共有する、理解者や支援者が立ち現れることにより、ソーシャル・チェンジが生起する可能性があると考ええる。

DI者の物語に焦点をあて、物語の立ち現れと変化の理路を、明確に説明できれば、その理路は科学性が担保されているとみなすことができる。そうした科学性が担保された理路は、人から人へ、人から集団へ、集団から社会へと、伝達することを可能とする。物語理論とエコロジカル・アプローチで構成された理路により、当事者

の変化を説明できれば、ソーシャル・チェンジの理路を明確にしていくことも不可能ではないと主張することができる。

このような理論的前提に立ち、筆者はDI者の発話・発言・意思から、オルタナティブ・ストーリーが再構築されているととらえることができるデータを、ここに公表しようとするものである。また、DI者のおかれた社会に関するオルタナティブ・ストーリーの構築並びに構築のためのプロセスは、他に類のない研究方法であり、本論のオリジナリティの1つであると考えられる。

2. アンケート調査の二次分析

2008年8月に来日したビル・コードレイは、WAIMHにて筆者らが開催したワークショップで、自らが行ってきたDI者の意識調査の結果を公表している。この調査結果のうち、本論の目的に引き寄せて看過できない結果を抜粋し、「表5：DI者の秘密開示と情報入手に関する意識調査」に整理した。

表5をみると、DI者の概ね半数は家庭の中で何らかの秘密があることを感じており(1)、回答者の全員が事実をできるだけ早くに知らされるべきであり(2)、その時期はできるだけ早い方がよい(3)(4)(5)(6)としている。また、知ったことによる害はほとんどない(7)としている。さらにドナーや兄弟姉妹に会いたい又は連絡をとりたいと思う者が7割を超え(8)(12)、それを権利だと考えている者も8割を超えている(10)(11)。つまり、DI者は、AIDで自分が生まれたことを知ったことが有害だとは思っておらず、その事実をできるだけ早くに知り、その事実とともに生きたいと願っていると解釈できる。

これらの結果をより詳細に考察するために、同調査の自由記述を分析してみると、次のような物語が抽出できる。なお、Qの番号は表7の番号と共通している。

Q2. DIで生まれた子どもたちはその事実を知らされるべきですか？

A. 子どもに真実を話さなくて良い訳がない。絶対に知らせるべきだ。誰もが、遺伝上の両親についての真実を知るべきだ。子どもが大きくなって、十分に理解できるようになったと両親が感じたら、話すべきだ。秘密がないことの利点は、どんなリスクよりも勝る。

Q6. 真実を知らなければ良かったと思いませんか？

A. 一度もない。どんなことであれ、真実を知ることには一番よいことだ。たいいてい仲間がそう思っている。真実を知る前は、とても単純なもの・単純な生活だった。何か知らされていないことがあると常に思っていたので、ほっとした。自分が持っていた多くの疑問・たくさんの混乱が確かめられ、解決した。真実により解放された。でも、真実が本当のことでなければ良いと思う。真実は現実を知ることには役立った。理解できなかった人生の多くのことを説明してくれた。自分自身の出自・病歴・健康・兄弟

姉妹との違いを知った。父親のことがわからないだけで、十分苦しい。父の遺伝病を受け継いでいないことがわかり、安心した。知る前は父の行動に戸惑うこともあった。しかし、父親の問題をより深く理解できたので、後悔はない。事実により親子の関係が強まった。私の権利を尊重し、信じてくれるようになった。両親に心から望まれて生まれてきたと考え、自分は特別な存在だ。全ての子どもが遺伝的なつながりのある両親のもと、安定した関係を持ち、安定した関係の中で、育てられる権利がある。今でも自分の誕生に関する状況・ドナーの情報・真実を探しているが、入手する方法がない。

Q7-1. 秘密を打ち明けられることは有害だと思いますか？

A. 有害なのは秘密だ。父親のことを決して知ることがないのだと悲しく思うとき、有害だと思う。大人になって自分が、人を信じない人間だと気づいた。このことは人間関係に影響している。母は長期の嘘をつき、私の不信感を高めた。真実を知り安堵した。理解できる年齢を超えても、母は嘘をつこうとした。母との関係が変わった。母は私のことよりも自分のことを心配していた。真実は家族の中での力関係・父の態度を明らかにした。驚くほど開放的になり、父の承認や愛情を得ようとする努力をやめた。真実は衝撃的で、偶然に知った。時に悲しみ、空っぽな気持ちに完全に圧倒されることがある。真実を知らなければ、病気の心配をし続けていたので、感謝する。真実を知ったとき、父の死後だったので、父と話し合うチャンスを奪われた。気楽に話してくれたら、親密になれたのと思う。子どもを持つために最良の方法を取ったのだと、両親に一層感謝する。愛されて望まれていたと実感する。

Q7-2. 真実を打ち明けられる前、秘密があなたに影響を与えましたか？

A. 秘密は、人生に付きまとう大きな影響を及ぼす。自分が思っていたような自分でないことを発見した。自分が悩んでいたことを、両親はわかっていた。私は自尊心のない非常に不安定な子どもだった。アイデンティティの問題を抱え、何かが欠けていると感じていた。性格の問題で、父親から拒絶され愛されていないと思い、父親を遠い存在に感じていた。しつけはひどいものだった。父親を喜ばせようとして失敗した。失敗する恐怖感に苛まれていた。

Q12. ドナーと連絡を取りたいですか？

A. 52年も経っていなければ取りたいと答えただろう。会いたい、でも、かなわない夢だとわかっている。連絡してみたい。そうすれば完全になれる気がする。メディアを利用して、ドナーの身元を知りたいと訴えた。ドナーのすべての記録が破棄されていた。口惜しい。拒絶される恐怖で、ドナーを探すのが怖い。すでに話した。ドナーが誰かを知っただけで満足だ。ドナーが前向きな姿勢で、連絡を望んでいるのなら連絡してみたい。

表5 DI者の秘密開示と情報入手に関する意識調査

1	秘密があると感じてたか？	人数	比率	2	DI者は事実を知らされるべきか？	人数	比率	3	いつ知らされるべきか？	人数	比率
	はい	46	44.2%		はい	100	96.2%		できるだけ早く	90	86.5%
	うっすらと	6	5.8%		いいえ	0	0.0%		大きくなってから	9	8.7%
	いいえ	44	42.3%		分からない	4	3.8%		分からない	4	3.8%
	回答なし	8	7.7%								
4	もっと早くに知らされるべきだったと思うか？	人数	比率	5	DIについて何時期知らされるべきか？	人数	比率	6	真実を知らなければ良かったと思うか？	人数	比率
	はい	73	70.2%		できるだけ早い年齢で	57	54.8%		はい	7	6.7%
	いいえ	20	19.2%		その他の年齢で	32	30.8%		いいえ	79	76.0%
	回答なし	10	9.6%						いつも	17	16.3%
7	秘密を打ち明けられることは有害だと思うか？	人数	比率	8	ドナー/兄弟姉妹に会いたいと思うか？	人数	比率	9	真実告知以前の秘密の影響はあったか？	人数	比率
	有益	52	50.0%		はい	76	73.1%		はい	55	52.9%
	ほぼ有益	26	25.0%		いいえ	6	5.8%		いいえ	36	34.6%
	どちらともいえない	17	16.3%		分からない	11	10.6%		回答なし	12	11.5%
	ほとんど有害	4	3.8%		兄弟姉妹にだけ	6	5.8%				
	有害	3	2.9%		兄弟姉妹に会った	1	1.0%				
10	ドナーの病歴を知る権利があると思うか？	人数	比率	11	ドナーの身元を知る権利があると思うか？	人数	比率	12	ドナーと連絡を取りたいと思うか？	人数	比率
	はい	103	99.0%		はい	84	80.8%		はい	76	73.1%
	いいえ	0	0.0%		いいえ	10	9.6%		いいえ	11	10.6%
	回答なし	1	1.0%		分からない	9	8.7%		回答なし	11	10.6%

上記のことから、DI者が抱えている思いには、[AID]という事実よりも、[隠された]という事実に対する怒りや口惜しさが際立ち、比重が重いことが了解できる。

IV. 結論

DI者へのインタビュー並びにDI者の国際会議での発言、さらに国際会議で報告されたアンケート調査の結果を考察し、次のような結論を導くことができた。

1. 結論

DI者の発話から形成したビネットには、①時間を経過しても変化せず、DI者の思いとして共通するもの、②何らかの理由で変化し、部分的に条件を加味すると、DI者の思いとして共通するもの、③DI者の発話として記録されたが、その内実としては個人的な価値観や育ちに影響を受けており、DI者の思いとして共通しているとは言い難いものが含まれていた。したがって、上記の①及び②とDI者の国際会議での発言要旨から、DI者は、時間が経過しても変化することが少ない、DI者に共通する思い—[4つの訴え、4つの願い、自助力]を有すると結論付けることができる[結論1]。

DI者の物語は、「対自己」に対する物語から「対両親」へ、そして「対社会」へと広がり、確実に変化している。3つのレベルを、ソーシャルワークというマイクロ・メゾ・マクロの領域解的に照らしてみれば、[マイクロ-対人][メゾ-社会参加][マクロ-社会性]が対応し、DI者の物語が[対社会]にまで広がる。ということは、自己認識がマクロレベルに影響を及ぼすところまで広がっているといえよう。すなわち、[社会]に対してDI者自身が訴える力を発揮できるまでにエンパワメントされたと受け止められる。それは21世紀の初め、筆者らが本研究課題に取り組み始めたときには考えられなかったDI者自身の変化であり、国際会議という舞台を通して国際的に発信された、その訴えは“同時多発的”に世界各国でインターネット上でも展開されており、かつ、その動きが連帯を帯びている。つまり、DI者が自ら再構築した物語は、マクロなレベルにおいて認知されていく理路を確実に形成し続けていると考えられる[結論2]。

このように結論付けることができるならば、DI者は、自らの物語を、前記で取りまとめた「DI者の発言要旨」のように訴え、DI者の求める人権にかかる物語を、権利として獲得できるまで語り続けることができるならば、自らが有する表現の自由・伝える権利を有したことになる。すなわち、DI者が被っている「人が人をコントロールする、支配する」という人権侵害から、自らが発言することにより解放される契機を獲得しようとしていることになる[結論3]。

ソーシャルワークが、こうしたDI者のナラティブをサポートすることができるならば、DI者を取り巻く『真実』からの疎外「社会的孤立」「社会的排除」「社会への非参加」という人権侵害とその相乗効果から、DI者を

エンパワメントし、当事者として権利の獲得のための運動に参画し、理解者や支持者を拡充していくことに努めることになる。こうしたDI者によるDI者の運動は当事者間の自助力に負うところが大きい。そして、当事者の訴えは、理解者や支援者を増加せずにはおかない。よって、DI者が自らの物語を語り続けることは、人権侵害から自らを解放するために欠かせない要件であると考えられる[結論4]。

以上のことから、本論の結論を再掲すれば、次のとおりである。

1. DI者は、時間が経過しても変化することが少ない、DI者に共通する思い—[4つの訴え、4つの願い、自助力]を有する。
2. DI者が自ら再構築した物語は、マクロなレベルにおいて認知されていく理路を確実に形成し続けている。
3. 「人が人をコントロールする、支配する」という人権侵害から、DI者自らが発言することにより、自らが解放される契機を獲得しようとしている。
4. DI者が自らの物語を語り続けることは、人権侵害から自らを解放するために欠かせない要件である。

2. 本論の限界と今後の課題

本論の限界は、DI者が自ら訴える、DI者固有の人権の獲得への運動を、DI者集団による[自助力]と表現した。しかし、[自助力]とは何かについて十分な考察をなすに至っていない。[自助力]を考察するための視点として、セルフ・ヘルプ・グループが本来的に持つパワーの考察が想定される。しかし、2010年2月現在、わが国におけるDI者のセルフ・ヘルプ・グループは立ち上げが模索されている段階であり、その検討は他論に委ねることにしたい。

本論は、平成20年度科学研究費補助金科学研究費補助金(若手研究(スタートアップ))「非配偶者間生殖補助医療で生まれた子どものナラティブ再構築に関する研究」(課題番号:20830112)により実施した研究の一部である。

(注)

- 1 宮嶋淳・才村眞理(2006)「非配偶者間人工授精における人権侵害とソーシャルワーク」『社会福祉学』47(3)、pp16-28.
- 2 [DI発話指標]とは、筆者が「DI者の求めに即したソーシャルワーク・プラクティスに関する研究—ナラティブ・アプローチの適用可能性について—」『社会福祉実践理論研究』17(2008年)において公表したものである。
- 3 才村とは、帝塚山大学心理福祉学部教授で、非配偶者間生殖補助医療で生まれた子の出自を知る権利の提唱者の一人。